

## 素人のざれごと(戯れ言)

### 『日本語で生きよう!』(1)

Q=女子中学生の素朴な好奇心

「日本語のことをもう一步知りたい」

A=古稀老人の願い

「日本の魅力を日本語で学ぼう」

#### はじめに

新聞の見開き一杯に「あなたは何語で生きますか」との意見広告が載っていた。私は古稀(こき=70才)を過ぎる今日まで、日本で生まれ日本語を話し、拙(つたな)い文章も残してきた。と当たり前の感覚で「日本語」と口にして腑(ふ)と考えさせられた。「私は日本語を本当に知っているのだろうか?」と自問。そんな迷いの抜けきらないまま、仕事に就いた。事務員さんとのさりげない会話のなかで、気になる朝の新聞の「あなたは何語で生きますか」を話題にしていた。真面目に聴いてくれていた彼女も「実は私も……」と反応し「中学生の娘や小学生の息子に何かと問われて……」「今の話を子供たちに聞かせたいので、文章にまとめてくれませんか」とのことです。少しでも役に立てればと、「日本語について」浅学ながら、まとめてみることにした。

もとより私はその道の高等教育を受けた身でもなく、人生の大半は電気系防災技術者として生きて来て、還暦を迎える頃から元々興味のあった「歴史系」と「環境問題」に、素人の立場で係わっている。

歴史系の仲間と探訪中に「現代人は弥生人の延長」「弥生人によって連作できないイネを、水耕稲作の技術で克服し、2500年の歴史を経て現在も続いている」「一粒のイネがワンシーズンで2500~4000粒に増える穀物の中でもダントツ」との自説を語ると「今まで聞いたことの無い。それホント?」とする仲間の声が上がった。それを契機

に関連の拙文を何本か纏めることが出来た。

調べてみると、例えば「当時東シナ海を中心に倭人=海人(あま)族が活躍していた」ことまでは学者が論じるが、肝心の移動した舟=船のことでないと、考古学資料が乏しく論文は少ない。いわんや「当時のことば」については皆無に近い。私の仲間の野崎豊氏は、海上輸送には「ヒョウタンとカラス」が活躍したと、信じ難いような教えを戴いた。学びを進めると野崎先輩の説は、神話=記紀や万葉集に登場する説話で当時使っていた「ことば」もこの辺に存在しそうである。

果たして私に中学生に解ってもらえる文章力があるかどうか自信ありませんが、いわんやその道の専門家でも、論文でもありません、おしゃべり好きなオジサンの日頃の自説を、エッセイ風にまとめてみました。素人の「ざれごと=戯れ言」として聴いて欲しい。

#### 1. 日本民族の起源を考える

「言葉の起源」を考えると、日本語の起源がすなわち日本民族の起源でありそうです。そうすると先ず日本人の起原を考えなくてはならない。日本列島(以後列島と表記)が中国大陸(以後大陸)や朝鮮半島(以後半島)と繋がっていた今から2万年(最後の氷河期)ごろまでに、アフリカで発生した人類(約30万年前)のうちモンゴロイド古族(黄色人種)が大陸を北上し当時の日本列島に到着した。その後の温暖化で、朝鮮半島と切り離され列島の住民は孤立し、縄文人(新石器時代)として独自に発達しながら、今日の弥生人=現代人の人種が生まれた。

猿人から人間になった時点で、二足走行と共に脳の発達から「話しことば」を持った。以後人種ごとに違う言葉を持つことになる。その意味で、縄文人は「縄文語」があったことになり、通説では古モンゴロイド系の古代語であるアーリア系サンスクリット語(古代インド・ヨーロッパ語族系=梵語)を使っていたことになる。

縄文時代とは日本固有の時代区分であるが1

万3000年間続いた。初期の縄文時代は今から一番近い氷河期で海水位が低く、大陸と陸続きでした。今の瀬戸内海は草原で寒い時代です。毛の生えたマンモスが闊歩(かっぱ)していました。現代も底引き網にマンモスの骨や牙が引き上げられて話題になりますね。縄文時代の中頃(約7000年前)には地球が暖まり海水が増え(縄文海進)今の山口県は殆ど海中に消えます。その後地球が再び冷えて、日本列島が現在の形になりますのは、3000~2500年前の縄文末期・弥生時代の始まりの頃になります。

その後中国南部の海洋系異民族と先住民の縄文人が和合合体し、新しい人種の弥生人が誕生することになり、縄文人の残像はアイヌなどの少数民族として今日まで続いている。(琉球・九州南部・高知の一部にも)

先にも述べた通り我々現代人は、人種的には弥生人の子孫であり、大切なのは縄文人の流れを引いていることだ。当然「古代話しことば=古代語」もアーリア系サンスクリット語の系統を含んでいる。(縄文系)

弥生人の歴史は約2500年から3000年と比較的短いですが、意外と話し言葉の実態は判らない。この時代にインドから発生した「水耕稲作」が中国の南部江南地方を経由して、黒潮(暖流)に乗って対馬海流・日本海海流・派生的に瀬戸内海に沿う形で、新しい文化・技術が伝来した。弥生文化は、連作が可能な海洋系水耕稲作文化でもある。縄文末期には陸稲(おかぼ)の栽培が始まっていた。しかし「イネは連作障害が出易い穀物」のため小規模な焼畑で移動しながらの耕作であった。

## 2. 弥生末期の日本人は大陸と交流

大陸沿岸部と朝鮮半島西側そして日本列島のシナ海を中心にした交流の痕跡は、考古学界の定説として、倭人族=倭族=海人(あま=かいじん)族が活躍した。

水耕稲作(主に日本列島)や鉱物資源(主に

朝鮮半島)の分野で飛躍的に発展した時代が、弥生時代(世界的には青銅器時代)である。勿論人口も縄文時代に比べ急激に増加します。

特に、二世紀前後には邪馬台国が存在し、卑弥呼が活躍したと、文字文化の先進地である中国の『魏志倭人伝』に記載され、彼女は魏王の好む、奴隸(縄文人=古族)100人や山繭(やままゆ)などを献上し、お土産に銅鏡など多くの品々を賜った。

卑弥呼たちは大陸の言葉が話せ、文字も読めたことは明白である。中国北部で発生した道教の祭祀を卑弥呼は身に着けていて、その意味で彼女は在来の弥生人とは違っていた。然るに「ことば」に関して、日本列島側には証拠となるものが存在しない。文字を持たない民族の悲哀なのか。当時の倭人=日本人は大陸の文化も当然文字も漢文も知っていた。記憶と口承による伝承や祭祀に伴う歌舞などで、ゆっくりと時代は流れていく。

ちなみに地球上には3000~6000語(類似方言も含めるともっと多いのでは)が確認され、今でも残っているのが約1000語で、その内文字を持っているのが300語、残りの700言語は文字を持っていないとの説が有力です。

(国家になると全て文字を持った言語になります。)

## 3. 古墳時代は独自文化

古墳時代は世界の中でも特有な時代区分です。お墓である古墳を時代区分にしているのです。4~500年間も続きました。特に前方後円墳は列島固有のお墓です。中国や朝鮮半島の影響を全く受けていません。逆に考えれば彼らの文化を拒絶し無視続けたと考えます。固有の文化が醸(かも)し出されていたのです。

弥生末期には海洋系農耕民族の先住民=弥生人の祖先崇拝的の祭祀(太陽中心の自然崇拝)から、大陸系の祭祀(星=中でも北極星を中

心にした北辰信仰を持つ騎馬民族系)に移行しています。多くの弥生集落を支配する新しい民族の到来です。武器(馬)を持たないで海を渡って来た少数の騎馬民族が、民衆から崇敬され支配者層に君臨したのです。本国の大陸や半島の文化を、表面的には一見無視し、拒否しながら、新しい支配体制を確立したとする『騎馬民族王朝説』を江上波夫(1906～2002)先生は戦後直後に発表し、批判も受けましたが学説は生き続けます。

彼らは政治的には支配者層に君臨しましたが、弥生人の持つ「文化＝ことば」まで変更することは出来ませんでした。それどころか弥生人＝弥生社会に融けこもうとしています。騎馬民族(遊牧民族)でありながら農耕民族の風習を多く残こそうしているのです。今の天皇家も明治天皇以来、天皇が皇居に水田稲作を、養蚕を皇后が古式にのった行事として継続しています。私は江上先生に近い考えを持っています。言葉だけは騎馬民族系(漢民族も同系)ではなく、海洋系が続きました。それを裏付ける学説があります。

#### 4. タミル語が黒潮に乗って

##### …大野晋 説

話し言葉は考古学的な物的証拠を残しません。考古学の限界です。歴史学は文章が全ての世界です。文字の無い時代の話ことばを検証するには、言語学、中でも比較言語学の大家であった、大野晋先生(1919～2008)の説が、私の「海洋系水耕稲作伝播が弥生人を生んだ」とする考えに一致します。下記は平成7年(1995)7月8日朝日掲載の記事です。

この記事は大野晋先生の『日本語の起原』(岩波新書・1953)が発行されベストセラーになり、初刊から20年たち新版を出された機会に、若手の学者が先生を囲んでのシンポジウムでの資料の一部です。



大野晋著『日本語の起原・新版』(岩波新書)から

タミル語はインド亜大陸の東南部、現在のタミルナドゥ州を中心とした地域とスリランカ北部に住むタミル人、計約五千万人が話す言葉。亜大陸北・中部で話されているヒンディー語などアーリア語族に対して、亜大陸南部で話されるドラビダ語族の一つ。同語族の中でも紀元前後成立のサンガムという詩歌集をもつので、正確な古代語研究ができる。インド東部にはこの二大語族と系統を全く別にするムンダ語がある。

##### 平成7年(1995)7月8日 朝日掲載の記事

先生はインド南部のタミル人が、水耕稲作の技術を持って、太平洋の黒潮海流(暖流)が大陸に沿って北上したとする考古史学を押さえた上で、専門の比較言語学の手法を用いて新説を論じている。詳しくは先生の説を読み解いてください。私は当時あまりピンと来ませんでした。弥生時代を学ぶ内に改めて、大野説が私の考えに一番近いと気づいたのです。

「弥生人の末裔の現代人が、縄文語の残像を残しつつ、水耕稲作文化の里である古代インドのタミル語を踏襲している」との説は、説得力があります。先生亡きあとも燦然(さんぜん)と輝いている説と私は思います。

タミル語の話しを仲間としていたら「ネパールとブータンの間にあるヒマラヤの山あいのシッキム地方(現インド領)に住むレプチャ族の言語と、日本神話や今の日本語に共通点が多いとの説も有力」と、私の身近な仲間のうち文化比較論に詳しい中山亘先輩からのアドバイスを戴いた。安田徳太郎(1898～1983)博士が調査研究し提唱されているとのこと。今後学びを深めたいと思う。

ブータンの国王夫妻が新婚早々に、わが国に

訪問され、「幸せの国＝国民総幸福」を掲げる姿勢は、訪問先の随所で報道されて好感を得た。同じ人種を祖先に持つ近親感も共有できた。もしかして安藤徳太郎先生の説が最も有力な説かもしれない。



2011 年来日中の国王夫妻 朝日掲載

以上で古代日本人(縄文人と弥生人)の「会話＝はなし言葉」について私の考えを述べました。次は日本語の書き言葉＝文字・文章について考えましょう。

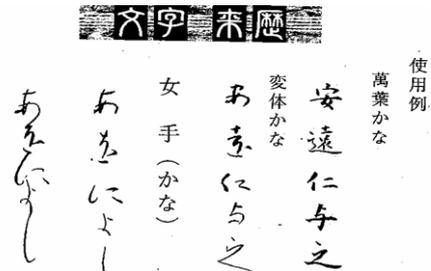
## 5. 文字の導入を古事記と

### 万葉集で見る

日本の最初の国史は『古事記』と『日本書紀』であります。編纂(へんさん)されたのは西暦 712 年と 720 年ですが。その後の扱いは大きく別れています。その理由を古事記は「天皇家のことで国史とは言えない」。日本書紀の方が「天皇家以外のことにも触れていて国史と言える」と学んで来ましたが、私はそれに加えて別の考えがあります。

日本書紀と古事記は共に漢字を用いていますが、正式な漢文表記で書かれているのは日本書紀で、古事記では説明文などは漢文に近い表記になっています。しかし当時発音していた「はなし言葉」のうち、固有名詞(神様の名前や地名など)歌謡(当時歌われていた謡曲)は、一つの発音に一文字の漢字を当てて表記しています。場面によって同じ発音でも引用漢字が違う「ややこしさ」や「煩(わずら)わしさ」が、当時の国民に公開されなかった原因の一つと考えます。

下図は山陽新聞に載った、高木聖鶴先生(1923～ 文化勲章 2013 年受賞総社在住)の囲み記事を引用します。2003.15.11.6 掲載



万葉仮名の最初の原語は右端の「行」のように「安遠仁与之＝あをによし」で始まります。次が変体かな、最後の二行に女手(かな)の文字です。当時の発音を敢えて漢字で充てていることが判ると思います。

古事記も江戸期に入り本居宣長(もとおりのりなが)(1730～1797)の『古事記伝』により多くの人々の目に触れることとなります。日本書紀は曲がりなりにも漢文なので、漢文の解るできる知識人であれば、誰でも解読出来ました。編纂された当初から公開され国書としての役割を果たしました。

その後、漢文は国家の公用語＝男性語として近代まで続きます。教養人の必須知識(学問)でした。日本書紀は、年代も構成も他国(中国)を意識して編纂されています。律令国家を目指す当時の官僚の意気込みが感じられます。

古事記から約 100 年後の万葉集も古事記に似た書き方です。内容の内、歌謡などに類似が多く、私は現代語訳しか読めませんが判読は万葉集との兼ね合いで理解されているようです。

## 6. 歌と踊りで伝承

古事記や万葉集の歌詩の中に当時(私は弥生社会以降)の「話し言葉」が隠れていると前段で申しましたが、実は話し言葉しか持たない民族に共通して残っているものがあります。

「音曲と踊り」＝歌とダンスです。ハワイのフラダンスは私もワイキキの浜で直接観させていただきました。可愛い少女から年配の貫禄ある女性の身振り手振りは感動的です。ハワイの歴史を表現

しているとの解説ですが  
歌の歌詞の意味は解らなくてもなんとなく理解できます。台湾のアミ族の民族舞踊も同様な感銘を受けました。



日本にも記紀に出てくる「アメノウズメ」が舞踊りますと、天照大神が……の神話は有名です。最近ではテレビの番組でも世界中各地の少数民族を紹介していますが、文字を持たない民族でも必ず儀式としての歌舞音曲は、老若男女共とても楽しそうです。楽しみながら大切なものを身に付けて、後世に伝えているのです。

古事記や万葉集の中でも歌詩の部分は、当時の人々も大切にしていた部分だと思います。リズムを付けて覚えていたのでしょう。

池澤夏樹(1945～)氏は最近まとめた『日本文学全集の第1巻』で「古事記は口で語り継ぐ口承文芸」「ことばのリズムを大切にしたい」と親子二代の研究成果を述べている。(山陽新聞2014.8.1)私も同感である。私は歌も踊りも不得手だが観賞するのは楽しい。

## 7. 文化の発展が文字を必要とした

前段で少し触れましたが、話し言葉はあっても文字を持たない言語が多いのが世界の実態です。民族ごとに最低固有の「はなしことば」を持っています。少数民族も隣接する他民族と交流が発生すると、今の通訳みたいな役をした、知識人(先人・老人＝指導者)がリーダーになって部族を引っ張っていきます。それが拡大し、集合したのが国家です。国家になると税金や兵役など色々な取り決め(現代の法律など)が必要で、文字＝書き言葉が必要になります。多民族で構成

された国家になりますと、民族毎の言語を並列式に使う公用語を複数持っている国があります。こちらの方が多いかもかもしれません。(14項参照)

日本列島が弥生・古墳時代に入り「大王」や部族のトップが、権威の象徴として大形プロジェクト(古墳などや水田の土木事業)を、民衆を動員して遂行します。文字なしでは設計図などもなく苦労したことでしょう。倭人＝海人族の海洋交流も活発でした。四方を海で囲まれている日本列島は、大陸のような異民族の襲撃も無く、防御のための万里の長城を築く必用は無かったのですから、侵略・防御の面では好都合でした。

徐々にではありますが、古代中国の思想である道教や儒教も入ってきました。道教は日本の神々と結びつき大衆に溶けこみ今日まで「暦」や「還暦」「青春」など身近な風俗や言葉として残っています。儒教は人の生き様を教え、特に江戸時代に幕政の柱に置いたお陰で、民衆の「こころの柱」として現代にも生きています。ブラジルでのサッカー観戦者が自発的に行なった「ゴミ拾い」は日本人のこころ＝マナーを世界中のサッカーファンに感動を与えました。

## 8. 文字は仏教経典(お経)で学んだ

地域ごとの豪族のTopが縄張りで見栄を競い合う時代(古墳時代まで)から、他国と張り合う国体を作るには、中国のような律令国家を手本に、建国の基盤となるものが必要でした。

インドで発生した仏教はヒマラヤを越えて中国に入り(大乘仏教)、仏教を利用して発展しています。日本では聖徳太子らの天皇家等有力な豪族が、先祖伝来の「神」に加え仏教を「国教」として保護擁立します。当然仏典を学び、国は専用の学問所も造りました。経典を誦んじる言葉だけでは理解説明できない、教理・教義は全て漢文字あるいは梵字(古代インド文字)です。

仏教の伝来が文字の伝来とする説が定説です。

その年代は学者によってまちまちですが、ここでは六世紀初頭としておきます。

唐(618~907)の高僧である鑑真(がんしん)(688~763)が753年に大量の経典を持ち込み、日本に仏教の真髓(しんずい)を教えました。当時の学徒は水に飢えた砂漠のように、必死に経典に取り組めます。漢文を経典から学びました。当時は世界最先端の学問です。

既に卑弥呼の時代(二世紀ごろ)から、中国が文字を持つ、漢文の世界の存在は知っていました。当時は交流も限られていましたから、自分たちには文字を持つ必要性が少ないと思ったのでしよう。

仏教伝来は、日本列島にとって水耕稲作伝来以来と同様な画期的な出来事でした。当時の知識人は「先見の明」があったことになりま

す。漢文字を自国風に取り入れたと、私は概(おおむね)以上の考えを持っています。

## 9. 弥生語と漢字の融合

古墳時代まで使っていた列島の言葉を「弥生語」としますと、話し言葉を文字言葉に置き換える必要があります。一般には翻訳ですが弥生語には当時文字が無いので、厳密には翻訳とは言えません。前節でも述べた通り発音ごとに漢文字を当てがいました。古事記や万葉集に苦勞の跡が伺い知れます。

幸いなことに漢字は中国の象形文字(亀甲文字)の表意文字(文字にそれぞれ意味があり、形に模した文字)でした。

**注=今は亡き漢字学者の白川静(しらかわ しずか)**

**(1910~2006)先生の著作に詳しい**

表意文字に意味のあることが幸いして、漢文導入の早い時点で、「加点=レ点」や「ヨコト点」を発明し、漢文の左肩に付記して表記しました。読み下し時点で訓読み=日本語読みにしたのです。

現在日本で漢文を習いますと、必ず朱で付記

されています。本来の漢文には当然ですがありません。読む時も中国の発音です。漢文を訓(日本語)で読み理解するのは日本人の発明です。同じ漢字圏のベトナムにも日本流の訓読みがあるようですが、今はベトナム語(フランスの植民地の影響を受けてローマ字表記です)になっていて、漢字は一般の人には解らなくなりつつあります。

漢文字導入時点の当初から訓読み用に特別な工夫をするなど、先人の知恵に脱帽です。

## 10. 近隣国の言語の事情

ちなみに漢字文化圏は中国を中心に東アジアに国際語として広まりました。朝鮮・日本・ベトナム・台湾・琉球であります。

お隣の朝鮮は自国の民衆に漢字漢文は身に付けるのが困難と判断し、ハングル語を開発しました。音表文字で、ある種の記号のように見えます。意味はありません。現在も隣国韓国は漢字教育を続けていますが、日常はハングル語です。北朝鮮ベトナムは全く漢字を使っていません。その上現代の中国漢字と日本の漢字では、同じ漢字でありながら異なる略字を使っている、違和感があります。

朝鮮半島は中国と陸続きですから、太古の時代から中国の影響を受け続けて来ました。当然漢文字も早くから入ってきましたが、話し言葉は朝鮮族の言葉です。朝鮮語を漢字で表現するのに苦勞をしたようです。結局書き言葉は漢文に頼るしかなかったのです。

西暦1446年、当時の政権李朝は、『訓民正音』の令を公布します。それがハングル文字で、韓国語で「大なる文字」の意味だそうです。ハングル文字は母音10と子音14からなる音表文字です。漢字は学校では習いますが一般的ではありません。現在知識人は漢字を併用し、一般人は姓に漢字を用いる程度です。金(キム Kim)李(イ・リ Lee)朴(パク Park)崔(チェ Choi)鄭(チョン Chung)の五大姓が半数を占めます。これは個人

が先祖の姓を用いる夫婦別姓の習慣から来るものです。勿論普段書く時はハングル文字で書きます。

**日本の統治下では創氏改名(1939 昭和 14 年)が強制され、日本流の苗字に換えられた不幸な時代もあったことを付け加えておきます。現在でも朝鮮民族は、南北朝鮮と中国の旧満州に大きく、三つに分断されています。**

台湾も中国に近いのですが、歴史的にはマレー・ポリネシア系の 12 の部族(先住民=原住民)がそれぞれの言葉を持っていましたが日本の統治(1895~1945)下で教育やインフラが進み、その後の大陸から漢民族の到来で現在は中国語になっています。

琉球=沖縄は方言の項で触れます。ベトナムは先に触れました。漢語は廃れても中国から入った儒教はベトナム・朝鮮・日本に根強く基本的アイデンティティとして残っています。本家である現代の中国が、共産社会に変身して、儒教や道教並びに仏教が廃(すた)れているだけに奇妙な現象です。

## 11. 日本語の二重構造(真名と仮名)

漢字を学びますと漢字には一つの文字に書き方が、大きく五通りあります。篆書(てんしよ)・隸書(れいしよ)楷書・草書そして現代は簡体字で表記します。知識として学ぶのは大変なことになるのです。

**ハンコの文字は篆文字で刻印します。篆刻文字として日本でも馴染みが深いですね**

日本は早い時点で「仮名文字」を発明し、元の漢字を「真名字」と称しますが、仮名以外にも漢字に無い日本語は国字として創作して、逆に中国に移出させているのです。

**国字の例 榊(さかき)は木と神をあわせた国字の代表格他に国字の例を調べるのも面白いと思います。**

現代の外来語やカタカナ語なども同様な現象ですが、時代が違いますので別の項でまとめます。

早い段階で漢字を利用し、独自に創作した「仮名文字」で訓(日本語)を表記します。片仮名と平仮名の使い分けも致します。平仮名は万葉仮名(幕末期の文政元年 1818 年の時点で 973 文字)から発展したのですが、平安文化を代表する女流歌人が今に残る文化を担いました。政治向きは当時の国際語である、漢文で主に男性が公式文として使います。話し言葉と書き言葉は女性用語と男性語=公式用語の二重構造が日本独特の文化を形成することになります。

漢字の持つ表意性を利用して、日本語を漢字で書き、微妙な日本語の持つ言葉を簡略に表現しました。仮名だけですと長くなり、一見して目で理解することが出来ません。仮名文字で話し言葉を日本流にアレンジしています。仮名の記号性は話し言葉の中に生きているのです。その意味で日本語の二重構造を旨く使い分けています。

「漢文」から「読み下し文」そして「候(そうろう)文」へと発展移行し最終的には「漢字と片仮名との混合文」になり、戦後は漢字と平仮名になりました。昭和 24 年小学校に平仮名で(親の時代は片仮名)自分の名前を、やっと覚えて入学した頃が懐かしく思い出されます。昭和 21 年に通達が公布されています。

説明の途中でも申しましたが、漢字文化圏の中で、漢字を自国流に発展させているのは日本だけです。お隣の朝鮮は漢文・漢字の難しさからハングル語を開発しました。

本家の中国は現在多くの多民族(約56との説が有力)を抱え、公用語だけでは対応出来なくなり、難しい漢字を略文字に替え漢字文化=漢民族文化を普及させようと必死です。具体的には一般に「簡体字」と呼ばれている『国家通用语言文字法』を中国共産党が 2001 年に制定しています。特に最近ネパール等の少数民族の反動的動きに敏感になり、2011 年に再度通達を出して簡体文字の普及に努めています。

廣＝日本では広の略字ですが、中国の簡体字では

「广」を充てています。広州は广州と表記します

あまりにも酷(ひど)い略字の横行で 4000 年の漢字歴史が泣いているように私には見えます。

以降は次回をお楽しみに。

## 編集後記

○今回は8月のお盆に合わせて帰省した家族に先祖のことを語った田中康之氏に登場していただきました。高齢にも関わらず健筆に感謝して居ます。当先史古代研究会での出会いが何かの奇遇を感じます。

○山田良三氏の2回目の連作も「力」が入りました。樋口俊介氏の四国遠路も土佐の「修行の道場」が終り、次は伊予に入ります。

○「日本語で生きよう」は中学生を対象にしたエッセイ風の論文です。原稿用紙 120 枚になりました。3回のシリーズでお届けします。

○次の例会は 10 月 8 日(水)13 時 30 分から友愛センターで開催します。講師は地元小学校で郷土史を分かり易い授業をなさいました、中西厚会員に「上道(かみつみち)の物語」と、丸谷憲二会員に「草ヶ部大廻り小廻り山城の考察 古代迎賓館説」をテーマに多彩な写真を駆使して報告いただきます。お楽しみに。

○当会は例会を各月に開催(8 月は休み)し、主に会員の事例報告を行なって居ます。“きび考”は年 2 回発行し寄稿文を随時募集して居ます。今回は田中さんから初投稿を戴きました。会員は例会参加者を通じて、こちらも随時入会できます。会費は年 2000 円です。

### “きび考” 第 10 号

2014(平成 26)年 9 月 31 日発行

発行 先史古代研究会 会長 丸谷憲二  
事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1  
山崎泰二方

電話＝086-276-6654 FAX=086-276-2241  
メール＝senshi@bosaisystem.co.jp(事務局)

編集委員 山崎泰二(事務局長兼編集委員長)  
井上秀男 延原勝志 樋口俊介  
濱手英之 丸谷憲二(会長)